

博物館における考古展示の一樣相

——竪穴住居を素材として

紺野 英二

はじめに

歴史系の地域博物館における展示のあり方をみると、原始・古代より近現代を通史的に取り扱う通史展示と、その地域の主要なテーマを重点的に扱うトピック展示の二種類に大別される¹⁾。特に前者の通史展示において、展示で取り扱う対象は、原始・古代から近現代までを対象とするため、博物館の展示面積などの関係からすべての内容を展示に反映できないことが多い。このようにすべての時代の資料を展示することが難しいことから、原始・古代における「竪穴住居」に関する展示は省略されることがある。また、その展示のあり方については、遺構の写真を展示するものやイラストで表現するもの、模型を作成して展示するものなど多様なあり方が認められる。そこで小稿では、歴史系博物館における展示のなかでも竪穴住居の展示を対象としてその現状と課題を示してみたい²⁾。

1. 都内博物館史にみる竪穴住居展示

博物館における竪穴住居に関わる展示史について触れたものについては、これを伝えるものがほとんどない。大正期においては史跡として竪穴住居跡を保存・展示した事例は知られるが、これらは現代のいわゆる「遺跡博物館」のような扱

いである³⁾。戦後になると、それまで地域になかった博物館施設の設立が始まる。都内においては、昭和23年設立の武蔵野博物館の展示解説書『武蔵野の考古学』（A6版ヨコ、全20頁）には、縄文時代から古墳時代までの時代ごとの遺構や遺物を取り上げ、住まい（「住居」）についても、以下のように述べている⁴⁾。「住宅は竪穴家が多かったようである。武蔵野は厚さ三四十センチの下にローム土があって、縄文時式文化の人々の住宅の研究には、まことにつごうがよい所であり今日までの縄文式文化人の竪穴あとの研究は武蔵野のあちこちで発見されているものが中心となっているといってもよいだろう。竪穴家は遺物がなからのはっきりしたことはわからないが「とがり丸屋根」と名づけてもよい造りが多かったと思う。」ここでは、発掘調査により明らかになった竪穴住居跡の存在にふれるだけでなく、上屋の構造にも言及している。武蔵野博物館では、開館当時には屋外展示物として縄文時代の復元住居が建設されており、当時より屋外展示と館内での展示という展示構成であったことが推察される。なお、この展示構成の一部は、現在の江戸東京たてもの園にも踏襲されている⁵⁾。



写真1 武蔵野郷土館（1961頃）の復元竪穴住居⁶⁾

また、昭和27年(1952)には、武蔵国分寺に国分寺町立文化財保存館が設立した。文化財保存館は、武蔵国分寺周辺の遺跡から出土した遺物を保存・展示する施設として甲野勇の呼びかけにより設置された。なお、同地には万葉植物園も開園しており、地域住民の文化への高い興味・関心がこのような土壌を育んだと考えられよう⁷⁾。

博物館の展示物に竪穴住居が扱われるようになるのは、高度経済成長期以降からと考えられる。昭和40年頃には、大規模な土木工事を伴う開発事業が数多く行われるようになり、これに伴い発掘調査が必要とされるようになった。当時の発掘調査は、地方自治体が組織したものではなく、高校や大学の教員が中心となり、地域の市民や学生とが発掘調査を行っていた。昭和50年(1975)になると、文化財保護の充実をはかるため、埋蔵文化財保護制度の整備がなされた。これにより地方自治体が発掘調査の中心となり、組織的な体制が敷かれるようになる。また、高度経済成長に伴う生活様式の変化などにより、それまで使用されていた暮らしの道具等が不要となり、民具類が博物館資料として収集・保存・展示されるようになっていく。このような情勢のなかで、博物館では、昭和40年代以降には発掘資料などの公開の場としての博物館や展示室を求める動きがみえ、各地方自治体で自治体名に「郷土」を付した博物館の設立が始まる⁸⁾。当時は、人文系資料を総合的に保存、展示する施設として、資料館の名称の館が多かった。こうした博物館設立の動向は、各自治体で開発に伴う大規模な調査が進み、徐々にその調査体制が整うなかで、博物館は発掘資料をはじめとする地域資料の保存と展示の場としての役割を担うために設立されていった。昭和50年以降になると、「郷土」の名を付した博物館(総合博物館)が数多く建設される。この時期は、博物館が数多く建設された時期で、国内経済の好況などから自治体による博物館建設が盛んになる時期といえる⁹⁾。このように収蔵資料の増加は、博物館数の増加をもたらし、地域の埋蔵文化財である竪穴住居については、原始古代の生活跡として多くの館で遺構や出土遺物を展示するようになっていく。その方法は、遺構

としての竪穴住居を縮小模型や原寸模型で展示する例、イラストまたは図や写真などで示す例のほかに展示室内床面に竪穴住居の平面形サインを施す例なども認められる。また、わずかであるが、博物館の敷地内に屋外展示スペースを有し、竪穴住居の復元展示がされる例もみえる。このように現状の博物館における竪穴住居跡の展示には多様なあり方が認められる。

2. 歴史系博物館における竪穴住居展示

ここまでは博物館における竪穴住居の展示について、そのあゆみと展示の多様なあり方を示してみた¹⁰⁾。これらを展示の特徴ごとに注目し、以下のように分類した。まず、現状の博物館内で竪穴住居跡を「原寸の復元（造作含む）や床面サインで展示する例」とした。この好例としては、北区飛鳥山博物館や目黒区めぐろ歴史資料館があげられ、これをA類とする。次に、原寸復元ではないが縮小化

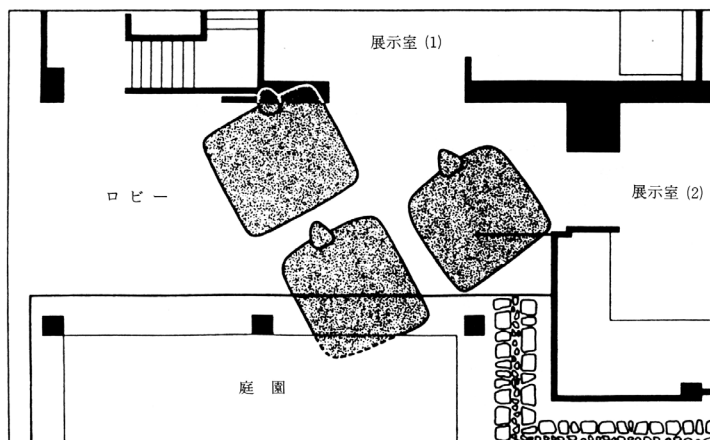


図1 品川区品川歴史館床面サイン¹¹⁾

して模型にしたものをB類とする。この例としては、八王子市郷土資料館の事例や府中市郷土の森博物館の事例がこれに相当する。なお、八王子市の展示は、閉館前の上野町所在時のものである。また、府中市郷土の森博物館では、縄文時代のムラの模型展示の中に竪穴住居が建つムラの様子が表示されている。ほかには、復元や模型などの設置はせず、イラストや図、写真などで示したものをC類とした。C類の古いものには、武蔵野博物館の写真による展示があげられるが、これは分析対象から除外し、過去10年において展示を行っている館を分析対象とした。好例として、清瀬市郷土博物館の縄文時代竪穴住居跡の発掘後の写真や、板橋区郷土資料館の解説パネル(挿図)をあげた。D類は、館敷地内に竪穴住居の復元を設置している施設とし、東京都埋蔵文化財センターや江戸東京たてもの園をこの例とした¹²⁾。また、自治体の立地等により竪穴住居の検出できないところもある。このように展示に竪穴住居を扱わない館をE類とした。こうした基準をもとに都内の主な公立博物館44館を分類すると以下のような結果となった。

A類：館内に竪穴住居の原寸復元で展示(床面サインを含む)をする例(4例)

B類：館内に竪穴住居の縮小模型で展示する例(6例)

C類：館内に写真やイラスト、図などで竪穴住居を展示する例(19例)

D類：博物館の敷地内に竪穴住居の復元を設置する例(2例)

E類：博物館内外に竪穴住居跡の展示などを行わない例(13例)

こうしてみると、多くの歴史系博物館で、竪穴住居を説明する展示が存在することがわかる。竪穴住居を扱わない館は全体の約29パーセントにのぼるが、中央区など都心部で竪穴住居跡などの遺構が検出されない場所や博物館が独立して存在しない館、展示室の有効床面積が狭小なところという特徴が認められる。また、B類やC類のように、限りある展示室の有効床面積を合理的に活用するために、各自治体の歴史系博物館では、縮小模型やイラスト、図などの解説パネルを

作成し、できるだけ多くの出土品を展示する努力をしていることが推察される。このような館は、全体の56パーセントにのぼる（その比率はB類が13%、C類が43%であった）。限られた展示面積に対し、竪穴住居の原寸復元や原寸模型を設置する館は4例、全体の9パーセントであった。なお、館の敷地内に竪穴住居の復元を実施する館は、2例で全体の4パーセントであり、A類とD類の総計は、6例、全体の13パーセントである。

このような結果から、歴史系博物館における考古系展示が大きなウェイトを占めていることがわかる。しかし、同時に博物館の展示室内という限られた空間に対し、なぜ、わざわざ原寸大の模型や復元を設置するのだろうか。とくにめぐろ歴史資料館は、平成20年（2008）に学校（目黒区立目黒第二中学校）を改装して開館した館で、都内では比較的新しい館といえるし、北区飛鳥山博物館は、平成10年（1998）に開館し、平成22年（2010）にリニューアルした館である。このような比較的新しくリニューアル事業を実施した博物館などでも、竪穴住居の復元を行っている理由を考えてみたい。

3. 博物館における体験・体感と学芸員の役割

現代の博物館における展示のあり方を見ると、展示資料との直接的なコミュニケーションを行うことが重要視されている。つまり、資料展示において体感・体験できる展示物を設置する博物館や、港区郷土歴史館のように、新たに「コミュニケーションルーム」という五感にうったえる資料展示を導入する館も認められる¹³⁾。この「体感・体験する展示物」を導入する傾向は、都内では、江戸東京博物館の展示物が比較的名だが、考古系展示についても「体験・体感」を重視した展示がおこなわれるようになった¹⁴⁾。なお、こうした「体感・体験」をコンセプトとした展示が増えているなかで、「触る」こともデジタルへ移行しようという試みも認められる¹⁵⁾。

さて、博物館内に実物大の竪穴住居や同様の構造物を設置することも「体感・体験」を重視しているからといえる。特に目黒区めぐろ歴史資料館では、竪穴住居跡以外にも「体験・体感」できる展示として発掘された「胎内洞穴」の原寸復元が設置されている。この「胎内洞穴」は、区内の富士塚「目黒新富士」の地下4メートルの場所に掘削されたものが発掘され、洞穴の最奥には、大日如来像が安置されていた。壁にも当時の人びとが掘った文字も再現されている。こうした洞穴も原寸大模型で展示している。このような「原寸模型」を設置することにより、見学者が当時の文化を「体験・体感」できる仕組みは、博物館設置の際のコンセプトとしたものであろう。同様に、竪穴住居の復元原寸模型も見学者が「体験・体感」することを意識した展示物であるといえる。この展示のコンセプトは、めぐろ歴史資料館の開館だけでなく、目黒区の文化財行政に永らく携わっていた学芸員¹⁶⁾が関わったものという。この学芸員によれば、竪穴住居の復元模型を小学校3年生の団体見学で利用していたという。見学時に案内する際、竪穴住居の復元模型内部にできるだけ多くの子どもたちを座らせ、「狭い」or「意外と広い」などの感想を聞き、子どもたちに印象づけるという。このように学芸員の誘導により、ただ見過ごしてしまうことが多い展示物も、学芸員からの問いの投げかけにより、子どもが感じたことを発言として引き出し、これにより「体験・体感」を「印象に残す」ことができるという。その結果、子どもに対しては、むかしの人びとの生活の不便さや狭さを印象づけ、大人に対しては、そこから当時の屋根の素材、床の様子や素材、食物を含む生活様式などに興味・関心を持ってもらうことができる。このように、学芸員が見学者を直接案内し助言を行うことにより、博物館の展示における教育的役割が増加する。この役割は、学芸員ではなく、展示案内をする市民ボランティアなどでも効果は同じであるが、その場合は博物館が展示案内の研修等を実施し、学芸員から案内時の助言のタイミングやコツを指導・共有しておくことが求められる。そのため、研修を行う学芸員も必要となるだろう。このような見学時の案内やガイドにより、展示の教育的な役割が高まるものとい

える。

ここで、学芸員の仕事について、ふれておきたい。学芸員の仕事は、博物館法第2条では、資料の「収集・保管・展示し、教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し」とあるように、博物館で保存する資料を集め、展示し、これを一般の人びとに「利用」してもらうべきであることが定められている。この「利用」のなかには、展示により見せる、解説文を読ませる、対面で展示の解説する、展示資料に関連する内容の講演会を実施するなど多岐にわたるものを含んでいる。前述の見学者に対する助言や案内も学芸員の仕事に含まれている。この助言や案内は、必ずしも対面で実施しなければならないものではなく、解説パネルや解説シートなどを用い、見学者が欲しい情報を取捨選択できるようにされている。そのため、ここでみた竪穴住居を写真や図で示し、解説パネルにて説明をするという方法も、一般公衆の「利用」に供するものの一方法といえる。つまり、学芸員は展示において解説パネルや対面、音声ガイドなどさまざまなツールを使用して、資料の内容や見方の情報を提供しているといえることができる。

また、現在の博物館では、考古、歴史、民俗といった分野で資料ごとに専門がわかれ、活動を行っている。それぞれの分野の担当が、個々の資料の「収集（整理）・保管・展示」を含めた多くの活動を実施している。これに加え、企画展の実施（企画展の関連講座などを実施することもある）、見学者の案内、講演会の実施などを行うのが学芸員の仕事といえる。これに、見学者や学校見学の案内などを加えると、どこの博物館も学芸員は激務であるといえる。また、博物館をとりまく財政的な状況も年々悪化してきていると言わざるをえない。近年、「ポケット学芸員」などスマートフォンのアプリケーションソフトなどにより、博物館の展示をガイドする方法も増えてきている。博物館側からみると、学芸員や学芸員に代わり博物館ボランティアの研修・指導や見学の対応を行う教育普及の学芸員がスタッフの存在が必要であり、これに対する財政的支援が必要であろう。博物館利用者に対して「体感・体験」を博物館のねらい通りに促すには、充実したス

タッフの存在が必要であるといえよう。そして、このような学芸スタッフのアナウンスによって、博物館に展示される復元住居や遺物などの「モノ」に教育的な効果が生まれるといえる。

まとめにかえて

小稿では、博物館の考古系展示の一部、竪穴住居の展示のあり方を素材として、これを分類、検討した。その結果、半数以上の博物館において、自治体が発掘などで収集した資料やデータを展示に利活用していることが判明した。しかし、資料を展示に利用する場合にも、博物館での学びや「体験・体感」につなげていくには、学芸員の適切な案内が必要であるといえる。博物館の財政的な困窮が問題視されるなかで、博物館が充実した教育的活動をおこなうには、人件費の補助、多様な入館者に対応できるツールを提供できるだけの予算など財政的な面も含め、相当の支援が必要であるといえよう。

注

- 1) 行田市郷土博物館では、常設展示の範囲を古墳時代戦国時代から近世行田の成立、行田の近代産業史の三分野を中心としたものにしており、これをトピックス展示の一例と考える。
- 2) なお、本文中で扱う竪穴住居展示は、公立博物館（登録博物館・博物館相当施設）の縄文時代から古代までのものを対象とし、復元住居や床面サインもこの対象とする。また、竪穴住居か竪穴建物とすべきかの用語の問題もあるが、小稿では竪穴住居で統一した。
- 3) 棚橋源太郎は、これを“site museum”とした。
- 4) 後藤守一述『武蔵野博物館叢書 第一輯 武蔵野の考古学—武蔵野博物館を見る者のために—』武蔵野文化協会発行、1949。
- 5) 松井かおる「『東京郷土資料陳列室』に関する企画展及び地域展実施報告」『東京都江戸東京博物館紀要』第13号、2023。東京における博物館の変遷としては、昭和9年（1934）、有栖川宮記念公園内に「東京郷土資料陳列館」が設置され（現・都立中

央図書館あたりとされる)、昭和23年(1948)には、井の頭恩賜公園内に井の頭自然文化園内に武蔵野博物館が開館した。さらに昭和29年(1954)になると、都立小金井内に移築(昭和16年)されていた光華殿を展示室として利用した武蔵野郷土館が開館した。武蔵野郷土館は、平成3年(1991)に閉館し、その資料は江戸東京たてもの園に引き継がれている。

- 6) 『江戸東京たてもの園だより』(Vol.58、P.3、2021)より転載。
- 7) 『企画展 甲野勇の軌跡』国立市郷土文化館、平成10年(1998)
- 8) 都内最初の区立の地域博物館である世田谷区郷土資料館は、昭和39年(1964)に開館し、昭和42年には、三多摩地区で最初の地域博物館となる八王子市郷土資料館が開館した。
- 9) 例えば調布市郷土博物館、青梅市郷土博物館は、昭和49年(1974)開館、清瀬市郷土博物館、羽村市郷土博物館の両館は、昭和60年(1985)に開館、府中市郷土の森博物館は昭和62年(1987)に開館している。
- 10) ここでは、都内の公立博物館施設、44館を対象とした。
- 11) 『立正博物館学講座年報』第1号、1987で挿図とともに紹介された(岡本桂典「大井鹿島遺跡と品川区立品川歴史館」)。品川区品川歴史館では、令和5年よりリニューアル事業を実施している。当該サインは令和4年度までのものである。
- 12) 江戸東京たてもの園では、「特別展 縄文2021—縄文のくらしとたてもの—」の際に縄文時代住居の復元を実施した。展示期間終了後となってもこれを解体せずに常設展示としている。なお、内部を見る、内部に入ることはできない。
- 13) 港区郷土歴史館では平成30年(2018)に開館し、展示物に触れることができるコミュニケーションルームを設置している。
- 14) 宮崎県立西都原考古博物館では、HP上で「ハンズ・オン展示」の設置を示す(ハンズ・オン展示範囲 (<https://saito-muse.pref.miyazaki.jp/web/observation.html>) 2023/12/01 検索)。
- 15) 科学技術振興機構HP(オンラインで標本に触れる!「未来の博物館」への挑戦 | Science Portal—科学技術の最新情報サイト「サイエンスポータル」(https://scienceportal.jst.go.jp/explore/reports/20201223_e01/index.html) 2023/12/01 検索)。
- 16) 目黒区の展示等の学校見学への対応については、元目黒区教育委員会 学芸員 横山 昭一氏のご教授によるものである。ここにお礼申し上げる。

小稿のなかで検討対象とした歴史系博物館は以下の館である。

あきる野市五日市郷土館 足立区郷土博物館 板橋区郷土博物館 稲城市郷土資料
室 江戸川区郷土資料室 江戸東京たてももの園 青梅市郷土博物館 大田区郷土
博物館 奥多摩水と緑のふれあい館 葛飾区郷土と天文の博物館 北区飛鳥山博
物館 清瀬市郷土博物館 くにたち郷土文化館 小金井市文化財センター 品川歴
史館 渋谷区郷土博物館 新宿歴史博物館 すみだ歴史文化館 杉並区郷土博物
館 世田谷区郷土資料館 立川市歴史民俗資料館 中央区郷土資料館 調布市郷土
博物館 千代田区日比谷図書館文化館 東京都埋蔵文化財センター 豊島区郷土資
料館 中野区歴史民俗資料館 練馬区石神井公園ふるさと文化館 羽村市郷土博物
館 八王子市郷土資料館 パルテノン多摩ミュージアム 東大和市郷土博物館 東
村山市ふるさと歴史館 日野市郷土資料館 檜原村郷土資料館 府中市郷土の森博
物館 福生市郷土資料室 文京区ふるさと歴史館 武蔵国分寺資料館 武蔵野市ふ
るさと歴史館 武蔵村山市歴史民俗資料館 瑞穂町郷土資料館けやき館 港区郷土
歴史館 めぐろ歴史資料館

(2024年2月1日受理, 2024年2月2日採択)

